「令和５年度第２回茅ヶ崎市いじめ防止対策調査会」会議録（詳細）

議題	「令和５年度いじめ防止サミット」について 次年度の「心のコップ」アンケートの取組について
日時	令和５年１０月２６日（木）１０時～１２時
場所	茅ヶ崎市役所分庁舎特別会議室
出席者氏名	【委員】 ・　滝　　充　　（国立教育政策研究所） ・　小島　秀一　（NPO法人ストップいじめナビ） ・　堀　　恭子　（神奈川県臨床心理士会） ・　川村　和美　（神奈川県社会福祉士会） ・　瀧本　康二　（神奈川県中央児童相談所） ・　木村　理江　（茅ヶ崎市ＰＴＡ連絡協議会） ・　青柳　和富　（茅ヶ崎市小学校長会） ・　工藤　裕一郎（茅ヶ崎市中学校長会） 【事務局】 木村教育指導担当部長、力石学校教育指導課長、堀内主幹、岡田主幹、大磯課長補佐
会議資料	・　次第 ・　アンケート試行に向けた意見集約結果のご報告 ・　参考資料（龍ケ崎市公式ホームページより）
会議の公開・非公開	公開
非公開の理由	
傍聴者数	０名

次のとおり会議が行われた。

１　開会

２　協議など（司会進行は会長）

（１）令和５年度いじめ防止サミットについて

【事務局より説明】

８月２９日に、各学校からオンラインにて、第４回いじめ防止サミットを開催した。当日は、小学生８８名、中学生４７名、教職員７４名、総勢２０９名の参加があった。内容については、前半に担当指導主事から「心のコップ」の話をし、後半にグループワークを実施した。

参加した教員への事後アンケートから、好意的な意見として、

- 題材については「心のコップ」の話は分かりやすく、自分や他者の気持ちを尊重することの大切さを実感できる題材である。
- グループワークについては「オンラインで緊張もあったが、他校種（小中）との意見の交流がとてもよかった」「中学生の司会が立派で感銘を受けた」「いじめ防止に向けた具体的な取組例や活用方法など、意見が活発に交換されていて、よく学んでいた」「『いじめは絶対にしてはいけない』『注意できるようにする』などの振り返りがあった」

などがあった。

課題として、

- 環境面では「ハウリングなど聞きづらい環境は残念であり、タブレット操作もオンラインと同時であったので、集中が難しかった」
- 開催時期や時間について「暑い夏休み開催であるため、声がかけづらく、小学４年生にしては２時間の会がやや長く感じられた」
- 場所の問題として「オンラインでもよいが、近隣学校が集まれるのであれば、どこかの学校に集合もできたのではないか」「グループワークの活動数が多くて、議論を深めるというより、意見を出すことしかできなかった」「司会への台本があるとスムーズな進行ができたのではないか」「来年も中学生に司会をお願いしたい」「「心のコップ」が２回目という児童・生徒がいたので、２年おきに題材を変えることはできないか」

などの声があった。

参加した児童・生徒からは、「「心のコップ」の大きさは違い、人それぞれ。私のコップは小さいかもしれない」「人のコップのことが気になるが、自分のことも考えたほうがよい」「人を知らない間に傷つけているかもしれない」「大きな攻撃で水が溜まるよりも、ちょっとの攻撃で水がたくさん溜まる方がつらいのではないか」「自分にぴったりの話。食欲がなかったり毎日涙が止まらなかったり、自分はもしかしたら本当に疲れているのかな」「「心のコップ」が分かるようになってきたら、自分を認めたり、自分を理解できたりなど、自分に何か変化が起きたことを表しているのか」「あふれることは

悪いことではないのかもしれない」など、「心のコップ」の話を聞いたうえで、自分の心の状態に思いを馳せる子、人へのよりよい関わり方など、思い思いに感想を持っているようであった。

また、サミットから学んだこととして、「励まされて逆につらい気持ちになることもあるので、無理に聞いたりせず、相手が話してくれたら一緒に考えたい。何も言わずに支えるにはどうしたらよいか」「変に詮索せず、相手が望んでいるのなら聞きたい」「いじめはよくないとしか思っていなかったが、自分に何ができるかが大事」など、今後の自らの行動に生かそうとする気持ちを表す児童・生徒も見られた。

意見交流によって、小学生も中学生もお互いのよさを感じるとともに、新たな考え方に気付き、充実した時間を共有できたことから、今後も、グループワークでの意見交流は続けていきたい。ただし、全校オンラインで実施するのか、近隣校に集合して実施するのかなど、場所や環境の検討、グループワークの内容や量の検討が必要である。

今後の題材については、先程のアンケートに「心のコップ」の話を聞くのが２回目という児童・生徒がいたと報告があることから、事務局としては新しい題材の設定も必要であると捉えている。調査会委員の皆様におかれましては、「心のコップ」ではない、いじめ防止に生かされる新たな題材について、ご協議いただきたい。

質疑応答

【委員長】

事務局から説明された「令和５年度いじめ防止サミットについて」御意見、御質問はあるか。

今回のアンケートの対象は何年生か。

【事務局】

小学校４年生から中学校３年生である。

【委員】

今回のアンケート結果を一般の児童・生徒は知ることができるのか。

【事務局】

事務局から各学校にアンケート結果を集約して発信している。その使い方は学校に任せているが、子どもたち発信で、一緒に考えていこうとか、子どもたちが授業をやってみようなどの活動があったようである。また、校長が学校だよりで紹介したこともあった。さらに、サミットの前から「心のコップ」の資料請求があり、先生が授業をやりたいという反響もあった。これらの結果も学校と共有していきたい。

【委員】

「題材を考えてほしい」という事務局の要望は、「心のコップ」を行うツールを出してほしいのか、グループワークの題材を出してほしいのか。

【事務局】

グループワークは５題あった。

１．「心のコップ」で思ったこと、心に残ったこと。
２．自分の「心のコップ」の水はどうやったら少なくなるか
３．友だちに「心のコップ」の水が溜まっていたら、あなたは何ができるか。
４．これまであなたのクラスはいじめをなくすためにどんな取組をしたか。
５．今後あなたはどんな取組をしたいか。

自分の意見を伝えることはできたが、時間の関係でなかなか深まらないこともあったようだ。事務局としては、「心のコップ」についての題材を繰り返し行うことで、子どもたちに広めたいという考えを持っている。ただ、「心のコップ」を併用しながら、これ以外でもいじめ防止についてアプローチできるよい題材はないかとも考えているので、アイデアなどをいただきたい。

【委員長】

全員の子どもが、どこかの学年で触れさせることを考えた場合、サミットなどの希望者で行う方法はある意味一番正しいやり方である。長い時間ではなく、「あなたたち自身の気持ちはどうかな」「他の人はどうかな」くらいの簡略化した内容にして、必ず、小学校４年生でとか、６年生とかの決められた学年の道徳などで必ず１回は扱っているという状況にすることに価値はある。必要なお子さんにきちんと届いているかが心配であるため、サミットの開催の仕方、あるいはグループの作り方も考えていく必要がある。小・中学校の校長会で価値があるかどうか、また、異学年で意見を聞くことに意味を見出すのであれば、１つにすることもある。いずれにしても２回なので、誰もが１回は知っている、自分には関係ないと思ったとしても知っておくことは全然悪くない、という印象を持っています。

【委員】

クループワーク時のメンバー構成は、例えば小学校４年生は４年生だけでグループを作ったのか、それともミックスしたのか。

【事務局】

各学校で学年人数の縛りのない形で参加している。例えば４年生だけ参加している学校や６年生だけという学校もあった。そこで、小学生と中学生を混ぜ、同じ中学校区を基本として、各学校一人ずつで３～４人で構成した。

【委員】

同じ中学校区にした理由は何か。

【事務局】

小・中連携の一環として、自分たちの進学する学校の先輩たちがどのように考えているかを知ることがよいことだと考えた。但し、アンケート結果を見ると、もっと広く意見を聞きたいという声もあるので、検討の余地がある。

また、今回、小学生が中学生の司会ぶりなどを見て「すごい」とも感じたようだ。中学生なりの考え方に感銘を受けた子もいたようであった。反対に中学生が「小学生の脳みそって柔らかいよね」という感想もあった。こういった面でも小中連携の効果があったし、学校区のつながりも今後深まっていくと

思った。

【委員】

同じ小学校区では、兄弟関係でつながりがあるかもしれない。あまり身近だといろいろな懸念もありそうなので、知らない人とつなげることの方がよいのではないか。クラスでいじめが実際にあり、その当事者がいるなど、仲間の前では言いにくいこともあるので、知らない人がいるサミットでは言えるのではないか。他の学校の子どもとミックスして話し合える方策はないだろうか。

【事務局】

確かにそういった一面もあるので、配慮していきたい。今回、同じ中学校区でやった意義は、当事者同士であったとしても一般的にいじめのことを考え、いじめ防止につなげていくことを考えた。

今のいじめの考え方として、コミュニケーションのずれが挙げられる。「そうしたかったわけではないのに嫌な思いをさせてしまった」ことがある中で、加害とされる子、被害とされる子が同じように話をすることにもひとつの価値があると考えた。ただ、言いたいことを誰に遠慮することなく言える場も作らなければならないという考えもあるので、今後検討していきたい。

【委員】

サミット終了後、小学校４年生が作った新聞を持参し、「この新聞を学年で共有してもよいですか」と聞いてきたので、学年の先生と相談して学年の児童に配付した。また、このサミットは子どもの主体的な取組を引き出す目的もあるため、他学年は壁新聞を作って報告をした。

令和元年から３つぐらいの学校が実践例を持ち寄って発表したと記憶している。その取組を振り返ってみると、子どもたちが主体的に取り組むということよりは、知識・技能を高め、予防ということでやっていただいたように思う。昨年のオンラインの取組を見て、校内での共有ができていないと感じた。また、小学生の発達段階では、中学生の意見を聞くことも大事だが、まず自分たちで教わったことを共有するだけでもよいと感じた。これを主体的な取組につなげていくためには、今後、いじめサミットの中でこんなことを取り組んでみようという各学校の共通理解があればよいのではないか。教わっている段階では主体的な取組にはつながらない。サミット自身は定着してきているので、やり方をバージョンアップしていった方がよい。

【委員】

子どもや教員の感想を聞くと、とても刺激を受ける。ぜひ、この声を保護者にも伝えることができないか。子どもたちの世界で伝わっていけば、保護者にも伝わっていきそうだ。家でそういった会話が増えていき、同じような思いを持った子がいることが家族に広がっていき、本当に困っている子どもの声が間接的であっても届くようになるかもしれない。困っている親も他の親から聞くことで茅ヶ崎市がこんな取組をやっていることが伝わり、保護者全体の理解につながっていくようになればよい。

【委員長】

「心のコップ」の題材そのものの問題と、学校で児童・生徒が主体となって取り組む際、やり方の注意点がある。また、主体性を育てたい、積極的に子どもたちを育成したいという学校は、サミットのよ

うな形を当然考える。保護者の中にも、実際その題材だけでも見れば、こんな考え方があるんだという気付きになる。そういうことが分からないまま、家族の中でもついついきつい言葉をかけてしまっているというのは、反省として考えるかもしれない。市民総ぐるみで、何かの機会に題材そのものに関して理解を深められるとよい。次年度やるときには、更に工夫すると思うので、その時に論議してほしい。

（２）次年度の「心のコップ」アンケートの取組について

【事務局】

前回の調査会から本日までに、メールで意見集約をした。当初は、ある程度予定表のとおりで、今回の段階でＡ案・Ｂ案が出て、そこからどれにしようかということになると想定していたが、いろいろ意見を交わしたところ、調査会の中で、それぞれの意見をきちんと議論したうえで案を決めていきたいという意見をいただき、その流れでやっている。９月末のメールにて、更なる実効的な議論をするうえで得ておきたい情報や資料があれば御要望いただくようお願いしたが、特になかった。

その他、当日の進行に関わる意見としては、小島副会長より、滝会長が「心の天気アンケート」に御記載くださった方法と比較した場合の改善点について御意見を伺いたい旨、御質問をいただいた。

また、委員より、調査の目的・メリット・結果の使われ方を議論して、確定したいこと、更に実施に当たっては、記入した結果が、記入した本人とそれを見た担任にも視覚的に捉えやすく、かつ、気になる子どもへのサポートについて、担任の相談にのる体制を整えるというところを押さえていきたいという御意見をいただいている状況である。

【委員長】

この進め方に関して、お話しされたことは至極もっともなことで、するかしないかということではない。そもそも目的、メリット、結果の使われ方が期待しているものとちょっとずれてきている、あるいは、期待通りにやろうとすると間に合わないのか。

それが確定した後、視覚的に見やすいとか相談体制とかという話が出ているが、もし、目的が心配や不安のある子どもや被害を受けている子たちからの訴えを作り上げるということであれば、相談体制ということになり、もっと早い段階の予兆の段階で予防的にということであれば、相談後の学級経営・学校経営の体制をどうするかという話になってくる。

いずれにしても体制作りが関わるが、少し付け足すと、匿名性みたいなものをどうするか。今回、担任に知られないところで市の方に報告が行く形になるので、その意味では安心だが、逆に言うと、対応を迫られた際、名前が分からないと対応のしようがないという問題も出てくる。一長一短で、どちらを重視するのかという問題点が一つある。もう一つはスピード感である。目の前で起きている現象を目の前で解決することが一番早い。そして、その結果を校長に報告、教育委員会に報告という形でよい。例えば、金曜日に施行すると、その結果の集約を土日返上で集約すれば月曜日の朝いちばんに返せる。土日返上でよいのかという問題が一つ。しかも、今だと試行している学校が少ないからまだよいが、全市で実施した場合、担当一人が土日返上で行うことはあり得ず、外注、アルバイト、ボランティアなどに

頼まないとスピード感は出てこない。当事者にとってみれば今日答えたら明日にでも動いてくれるのかなという感覚があるはずだ。それに答えられないことは問題がある。本当に困っている人の対応であれば、心の電話やいのちの電話などの形で、本人が嫌だと思った瞬間に何かできるものでないと難しい。金曜日の放課後まで待っていられない。そういう意味だと、困っている子どもたちを救うために何かやりたい、そういう子どもたちに少しでも手を差し伸べたいというやり方だとすると、今回のアンケートは少し違うと思う。もし、ここに焦点を置くとすれば、もう少しシビアでなく、もっと軽い段階から「最近、学校に行くのが嫌だと思うことはありますか」「友達との間で嫌なことはありましたか」程度の弱い感じで、「まあ、よくあるよね。そんなこと。よくあるかもしれないけれど、もしあったならば気に掛けるから、匿名でなくて自分の名前を書いても平気」くらいのレベルに薄めたものと言える。早い段階のものを集めていく。

大阪市でやっている取組は、１日の朝と帰りの２回実施している。実際は、朝だけ実施している学校や全く行っていない学校もあるようだが、そういうツールを学校に渡したという状況だ。厄介なことは、各学校で処理・解決するというものなので、市教委には結果が来ない。市教委に報告するためには学校でもう一度集約し直す必要があるので、今までと同様、市教委には重大事案が報告される形である。市教委に直接日々のものを挙げて、市教委が確認するものではない。１日１回のアンケートとしても、それを処理し、すぐに何かあれば即その場で担当者が声をかける、声をかけないまでも様子を見ながら「〇〇君、ちょっと」とか、「最近、元気」と話しかけるというようなことであれば、学校で実施し、集約することが一番現実的である。ただし、学校に負担がかかる。学校の負担を軽くするために一旦市に報告する形となると、行き帰りに１～２日かかってしまう。もっと薄めて、学校の先生がこの回答を見るという前提で、「ちょっと最近、体がだるい」みたいな本当のことが書けるレベルも、「本当に最近気分が落ち込んでいる」のようにかなり深刻な状態で「「心のコップ」の水が溢れそう」、もしくは「溢れちゃった」というレベルも聞こうとしたとき、深刻なレベルで、対応が１～２日かかってしまうのでは間に合わない。軽い段階であれば学校で直接処理することができるが学校負担があり、大阪市の実情を見ると、まったくやっていない学校があるということは、それすら負担と感じたか、意義を感じないかという話である。

もう一つ、私は昔、「今日の調子はどうですか」くらいの話で、５段階で丸を付けさせるだけのことをアナログで、紙に書かせ、回収することを行った。その後、担任が入力し、私は週に一度見るようなものだった。担任が入力するということは大変そうに見えるが、１項目又は２項目しか聞かないとすれば、３０～４０人のデータ入力は１５分程度である。しかも、先週の様子を書いた欄の横に入力すれば、いちいちグラフにしなくても入力しながら変化が分かる。担任がアナログで入力するメリットは「そういえば、今朝、変な顔をしていた」「給食お替りしてなかったよな」ということが分かることである。担任が負担となっても、本来、担任がやるべき業務だと思う。担任の負担軽減は別の所を軽減するべきで、タブレットを介したとしても、必ず担任が目を通すシステムを作るべきだ。大阪市のような心の天気みたいなものにするのであれば、素早く対応できるものでなければならない。

一方、ここでやっている「心のコップ」の様にシリアスなものは、担任が介さない形を考えた方がよく、しかもリアクションそのものが素早くできるようなものでないといけない。断り書きで、「ここに書かれてもすぐに対応できないかもしれません」とあったが、そうすると書かれたことは本当に困ったことなのかという疑問が残る。大変なことも、緊急事態になった時手を差し伸べるようにしたいのか、それとも早い段階で、割と予防的に使いたいのかというあたりが両極にある。

現実に処理能力のことを考えたとき、市内全域でやろうとしたとき、間違いなく起きるのは市内の１９，０００人の児童・生徒が一斉に市役所のサーバーにアクセスしようとしても絶対につながらない。大阪市の様に学校でやらせた理由は、ここにある。Ｇｏｏｇｌｅフォームで出てきたものをＥｘｃｅｌ処理するのは、学校のだれができるのか。できる先生がいればその先生が他のクラスも集約できるので、そういうところが先進校と言われる。そうじゃない学校は程遠い状態になってしまっているということがあるので、簡単なものではない。

まず、真っ先に決めなければならないのは、どういった子どもを対象にして我々は手を差し伸べるのかである。基本的に本当に困っている子は、いのちの電話などの相談窓口で対応できるということを繰り返して知らせるしかないのではないかと思う。そういう子どもを専門的に対応する電話番を一人置くなんて言うことはできないことで、全国の数か所の教育センターで対応すればよいわけで、どちらかと言えば、それよりも手前の段階で救える子どものシグナルをどう捉えるかということではないか。

【事務局】

私はこのシステムをいろいろ試しているので、実際に今でき、我々が動ける範囲でやるものの例や、できないことを参考にしてほしい。

まず、緊急性が高く、大阪のような外注システムのことになるが、それは今すぐにできないだろう。まず、システム構築を業者と確認しながら見積もりをいただき、調査会の皆様からも意見を聞き、教育委員会として財政課に計り、予算を取る流れになるため、かなり中長期的な話になる。意見として承ることはできるが、予算の取得は分からない状況である。

次に閲覧権限は学校にもあるため、アンケートを取った後に先生がいつでも解答を見ることができる。先生に相談したいことにチェックが付いていれば声をかけていこうとお願いしてきている。それすらも負担であるという声や、いじめではないところでいろいろと相談を解決している状況になった時に果たしてこのやり方で効果があるかという先生からの疑問の声、当初の目的とのずれもあるという声も出ている。

全校でこのシステムを作るにはかなり膨大なデータになる。確かに週１回、１９，０００人の解答がどんどん増えていく。Ｇｏｏｇｌｅフォームのサーバーは耐えられるかもしれないが、それを整理・計算する時に教育委員会や普段学校で使用しているＰＣでは耐えられないのではないか。ビッグデータを分析・解析しないとするとむしろ大変になる。そこから学校ごとに数値を比較したり、学年・学級ごとに比較しようとしたりすれば、特別なプログラムが必要になる。

個別に学校の先生がフィードバックするには紙ベースがよいと思う。１年間、プロットシートみたい

なものに、毎週金曜日に書いてもらい、回収、先生が一目見れば動きが分かることから、先生が気になったら声をかける。「テスト前だからコップの水が溜まりました」とか、「ちょっとケンカしちゃった」とか書いてあれば、それを基に話ができる。先生に見てもらうという前提でやっているものであれば、アナログでやる方法が安価である。毎回、書かせて、回収して、読む先生はかなり負担となるため、実際現場でできるかは分からない。「いじめの月例報告」という別の案件で、実際の記入は２～３分であってもなかなか厳しい現状である。当然やって欲しく、やることは学校・子どもたちのためになると思っていても、忙しい中、緊急対応・トラブル対応がある中で依頼できるかということは、まさにこの場で委員の方から意見を伺いたい。業者に依頼、Ｅｘｃｅｌの活用、紙ベースと大きく３つの選択肢があるので、検討していただきたい。

【委員長】

何が必要かということを議論することと、現実的にできる範囲でどこに着地点を見出すかという話である。

【委員】

現実的な問題で、紙ベースという話が出たが、紙に書いたものが回収時に落ちてしまって見られたらどうしようと思ったり、本当に切羽詰まったりする子もいるのではないか。今までＰＣに打ち込んでとかタブレット端末に入れるという意見が多かった気がする。知られたくないから言わない子もいるし、このタブレットすらも打ち込みたくないという子もいる中で、紙に自分でいじめられていることを書くことは、本当に書いてくれるのかと思ってしまう。

【委員】

今、具体的なことを議論するより前に、何を目的にしてやりたいかということを決めてからでないと、方法も何もかも決められないのではないか。私たちはいじめ防止調査委員会なので、いじめがターゲットなのか、子どもたちの心の健康がターゲットなのかということを切り分ける必要があるのではないか。「心のコップ」アンケートはいじめだけではなく、「家がいろいろ大変」みたいないろいろなことが出てくると思う。ある意味では「子どもの心の健康に着目して、みんなで見ていきましょう」ということはとてもよい取組だと思うので、いじめだけと思わない方がよいと思う。このような取組であればみんなの合意が得られるのではないか。

茅ヶ崎市のいじめの案件に関わった時、最初の所で、先生方や大人がうまく対応できれば収まることができると感じた。誰が悪いとかではなく、うまくいかなくなることを防止したいのか、そうではなく、もっと広い意味で子どもたちの心の健康を支えたいのかを決めて方がよい。「心のコップ」アンケートはいじめの防止のようなものにもなるし、心の健康を支えることにもなるであろう。

入力はそんなに大変ではないことはよく分かる。Ｅｘｃｅｌ処理されている表になっていれば、担任が視覚的によく分かるが、その変化の意味がどのくらいかということは分からない。「心のコップ」アンケートでもよいとは思うが、紙で書いて回収して、入力する方法もありではないか。目的を何にするかで、ツールが決まると思う。紙だと心配なこともよく分かる。担任も配付から回収・保管など、結構

神経を使うであろう。

【委員長】

私もいじめの調査をしたときに、子どもたちにアンケートを書いてもらって、すぐに封筒に入れさせ、封をさせた。そうすると友だちにも先生にも見られないので、被害経験だけでなく、加害経験も３割近く表れる。研究所ならばこれでもよいが、正直に書いてくれた被害者に答えてあげようとしたとき、名前を教えなければならなくなった場合、約束を反故にしてしまう。したがって、担任に紙ベースで書くときには、「いじめられていますか」とか「いじめで困っていますか」という質問は絶対に使わない。恐らくは、「朝、気持ちよく起きられましたか」程度である。大体は気持ちよく起きられるものだが、「全然」となったら異常があることが分かる。体温計みたいなもので、体温で何があったかは分からないけれど、異常があったことは分かるのだから、その子を捕まえて様子を観察すればよい。そこまでの判断をするきっかけ程度でよいと思っている。それくらい簡単なものであれば、担任に書くこともできるし、場合によっては相談したいという項目に〇でよいのではないか。もし、紙を見られたら大変になるような項目を設定せず、先生が子どもに注意しなければいけないという程度が分かるものであればよい。それ以上のことが分からないが、目の前の子どもに先生が対応すればよいだけの話ではないか。我々研究者にとってはそんなこと分かっても何の意味もなく、もっと細かく聞くことになるが、使用目的によってどんな質問をどの程度聞くか、入力数が多ければ負担になるので、そうならないようにしている。

そうはいっても現場の先生にとってはそんなことはやりたくないという話にもなってしまうため、やるとなれば試験的な実施をお願いし、それを行う中で、質問項目はどれが一番よかったか、そして、観察していただくといった形を意欲のある学校に最初にやってもらうしかない。例えば、実際に気になったＡ君に３時間目の休み時間にちょっと話を聞いたら、ボソボソとしゃべった。放課後母親に電話をしたら、「実は最近元気がない」みたいな話になればよい。要するに、３０～４０人いる中で、とりあえず、今、見なければならない子は誰なのか、というのを把握する程度の役にしかたたない。しかし、それすらやらなければ学校の先生の中には忙しさのあまり一人一人を見なくなる。先生が一人の子の姿に気付かずに過ぎ去ってしまう。もう少し丁寧に見ている先生もいるだろうが、一人一人の子どもに対してあと数秒ずつ余計に時間をかけてもらいたいが、抽象的に言っても仕方がないので、このアンケートに出てきた子どもに関してだけは必ず声をかけてもらってその結果を校長先生に報告するようなシステムを無理やりにでも作らないと追いつかないかもしれない。私自身はあまりそういうことをやらせたいとは思わないが、必要性を感じた児童・生徒指導担当や校長がこのような取組をすれば、実際にいじめを減らすことに成功するであろう。そもそもやる気がある前提なので、やる気のある人が正しいツールを使えば成果は出る。やる気のない人にツールだけ与えてもただ適当にやるので意味がない。この会議自体も含めて、茅ヶ崎市全体で取り組もうとしていることはとても貴重な話であり、ここでこんなに苦労しているということも含めて発信することは重要なことだと思う。２０年前、海外ではいじめに取り組んでいる学校は評価が上がるという話をしたとき、「いじめに取り組んでいるなんて言ったら保護者からひどい学校だとクレームが来ますよ」という状況だった。今やっと、「いじめに熱心に取り組ん

でいる」ということがよい学校だという人とそうではない人が半々ではないか。発想の仕方で、「いじめの認知件数の高い学校の方がよい学校で、些細なこともみんな拾ってくれている」ということと同じであろう。多分２～３年後、「やっぱり先生たちがその気にならないと駄目だよ」ということになるのではないか。

【委員】

先ほど出た件は、紙ベースの方がよいという話か。タブレットで集約することの問題は、お金のことなのか。

【事務局】

紙ベースの方が準備は楽である。雛形を作り、当該のクラス全員に印刷、配付、回収、見るという作業が、パソコンを立ち上げ、アドレスに飛び、データを眺めて整理するより多分簡単である。そのＥｘｃｅｌデータをＧｏｏｇｌｅフォームで作ると、どんどんデータの数が増える。１クラス一つのフォームを全市分である２００～３００作り、それぞれのアドレスを間違いなく配り、毎週管理してもらう形は時間的に難しい。また、作成後、市で統計的に集約・分析することにも時間はかかり、作業も追いつかないと思う。

【委員】

私のイメージだと、通常ＰＣを立ち上げて、ログイン、画面にデータ入力してもらえば、紙ベースのものを書き写すよりも、学校の先生は管理が楽ではないか。

【事務局】

私のイメージは、紙ベースだとデータを１つずつ見なくても、その子のシートだけ追いかければよく、多分打ち込む必要もない。例えば、その子の面談の際にその紙を持って眺めれば、その子の変化は追いかけられる。いちいち入力する作業がないということである。そもそも一覧表にしてまとめる作業自体がそれを統計的に取り、分析することが前提になってると思っているので、紙でもアンケートフォームでも、データだけ見るだけだったら、そんなに変わりはないのかもしれない。分析するにはフォームがよいが、規模を考えると、結局、紙で全部見ながら集約し直すのとあまり変わらないというイメージである。

【委員長】

私の理解で言うと、アンケートをして子どもが紙をもらってきたら、先生はそこでそれぞれの子に対応をする。そうすると、１日目、２日目、３日目っていう風に出てくるので、それをパラパラと見れば、少なくともその子が、ここしばらく１だったのに４になったということが見れて、話を聞くことできる。それをＥｘｃｅｌにデータ入力することによって、学年・学校全体で共有しやすくなる。Ｅｘｃｅｌ処理しておけば、誰かが集約して市に送ればよい。ただ、その場で、「今、目の前にいる子で誰か困っているのか」を見たいだけなら、紙でやってファイルするだけでも十分である。

【事務局】

紙のイメージも、１回使っておしまいではなく日付が並んでるものなので、毎日その子は、自分の前

のやつを見ながら、「あっ、昨日はこうだったけど、今日はこっち」とかいうのを見て、どんどんその子の数年の動きが溜まっていくというものである。いわゆる、３０ページずつ毎日増えてくイメージではなく、３０人くらいと、３０人の紙の中で、どんどん１枚１枚のプロットが増えていくイメージである。

【委員】

そのお話も、システム上、もっと簡易に何かできるのであれば、クリアできる可能性はあるということになる。例えば、タブレットで入れて、それが自動的にＥｘｃｅｌの形でまとまっていく。それを見れば、その子のシートを先生が入力しなくても見られるようになるということであれば、それはそれでまとまっていく。ただ、それができるかどうかも分からないということでしょうか。

【事務局】

私は自分ではできない。

【委員】

私が気になってることは、一人ずつＥｘｃｅｌに写してくれればよいが、先生の手元に止まってしまうのではないかということである。やる気のない先生が一人で抱え込み、そのままおしまいになってしまうこともあるのではないか。実際に誰かがこれを他の人に見られてるというものがない限り、やる気のない先生は帰ってしまう可能性があるかもしれないので、どこかでデータ化して共有できる形にしておく必要があるのではないか。

私の想定しているものは、「心の天気」が基本的な方向性として、茅ヶ崎市で進めていた「心のコップ」アンケートを生かすために、定義を置き換えたものである。その上で、現実的にできる所を探っていく中で、毎日はさすがに無理なので、週１回か２回、または２週間に１回とか、ちょっと期間を長めにしてやりながら探っていく。プラスアルファとして緊急用ものをつけるといった形でここまで議論してきたと思っている。

もちろん、非常に心が壊れかけている人たちを救いたいということもあるが、そこまで言う程のことではないが、やはり本当はストレスを抱えている子どもに、先生には言わないけれどもどうですかと、聞かれれば答えるといった生徒さんたちに、今の状況や自分の精神的な負担を伝える、また、そういう機会を提供するということが非常に重要だと思っている。

感覚的な話で恐縮だが、大人になって、「あの時は本当に辛かった」「誰にも相談できなかった」という人が非常に多い中で、「先生から声をかけられて、解決に至ればよかったのに」と思う生徒をどれだけ減らせるか、ということである。一方で、即時性が非常に重要で、その日のうちに声かけられることが重要だと思うが、学校の先生の負担があり、可能な限りのところをやっていく。週に１回なのか２週間に１回なのか、という議論になってくるのではないか。

今後に関しては、今まで教育委員会が集計していろいろなことをやられていたが、今の話も踏まえると、意欲のある学校の先生が、実際に自分で入力し、対応していくということができるのか。多分、そこをやらない限りは、おそらくあまり意味がないと思っている。そこが、やれるかどうかという意味でのポイントになると感じた。

【委員】

目的について、いじめなのかどうかは置いといて、茅ヶ崎で「心のコップ」アンケートをずっとやってきて、子どもたちの状況をしっかりと見る取組で行こう、という目的を合意していると思ってよいのか。

【委員長】

私は、「心のコップ」アンケートがシリアスすぎると思っている。『大変』に丸をつけることが出てくるのは、２つの実験校の中学校で毎回やり、１人出てくるかどうかだと思っている。あの段階になったらもう手遅れっていうことであり、もっと前に、「昨日、晩御飯食べなかった」とか、「1 人で帰って寂しかった」みたいなレベルか、それよりもさらに前の段階の、「いつも仲のよい子が、今日は『プン』と横を向いた」というようなレベルぐらいを聞いていくことにしないと、実名入りで担任に渡さない。今、実名は入っているのか。

【事務局】

アンケートは、クラスと出席番号を入れている。名前は入れていないが、先生は誰が書いたかの特定はできる。

【委員長】

一目見ただけでは分からない。

【事務局】

はい。

「心のコップ」の大きさが人によって違うからだと思うが、回答の中には、ずっと溢れ続けてるくらいの勢いでずっとプロットしている子もいる。いつも不安定で、「辛い。辛い。」と書いてあるが、実際に会ってみると口で言っているほどではない。４、５、４、５と言ってるが、そこまで心配してなくてもよいと先生は対応している。また、「ずっと、もう、空っぽです」みたいな感じでお子さんもいるので、画一的な基準ではなく、実際に答えている子どもを見ないと分からないことだろう。

【委員長】

質問をもうちょっと削るのか、または、もう１つぐらい入れるかによってだが、いずれにしても、４だから大変、５だったら大変ではなく、いつも４の書いている子はいつも平熱が高い子だという認識であれば、別にそれはそれでよい。ただ、最初は確認が必要ではある。

そういう意味で言うと、外の変化が素早く、本当だったら４だったのがいわゆる５になったとしたら、その時にすかさず先生がなにかあったのかと言えるタイミングがもっとほしい。

システム作成を依頼することができれば話は簡単だが、お金と時間がかかるので、今すぐにはできない。さらに、せっかくそれが出来上がったとしても、それを見て「ふーん」としか思わないような先生がいたとしたら何の意味もない。先生が日々それを見て、リアクション取ることがいかに大事かということは多分伝えなきゃいけない。それを信じてやってみようと思っていただけるような学校があるかど

うかで変わる。先生方が動いていじめが減らないなんてことは絶対になく、先生方が動いてないから減っていないだけである。先生方が動いたのに減らなかったとしたら、やり方が間違ってることである。それこそ「お前ら何やってんだ」と怒鳴っただけでは、どんどん潜在化しくことがあり得る。ただ、学校現場にはそこまで危機感はない。

【委員】

児童・生徒の心の健康を大事にする、育む、そして、いじめから守るといった時に、教職員の主体性や教職員の資質は絶対欠かせない。その主体性をどう担保していくアンケートであることが絶対大事だと思っている。まして、負担感を抱いている教師がたくさんいるが、子どものことやいじめのことに関してモチベーションの低い教員は少ない。ただ、やり方や観察眼があまり高くない。今、若い先生が増え、先生方の心の健康もあり、正直、子どもたちの様子に気がつけない教員も多い。このアンケートをすることによって、本当に育っていくのかっていったところは、大事なこの話し合いの争点になる部分だと思う。

本校では、これまでのいじめの対応の経緯やＤＶサポートセンターの支援を受けて、いじめ防止プログラムに取り組み、その流れで教員がそういった土壌の中で主体的にやっている。「心のコップ」の授業は会議の日に本校の生活委員が指導され、今日の４時間目、各クラスの生活委員が主体となって「心のコップ」の授業を行っている。ほぼ同じ形で、ワークシートに取り組み、テレビ画面に映し出したものを見て考えさせて、ワークシートに記入後、自分たちで考えたり話し合ったりするといった授業をやっている。

また、年に何回か生徒アンケートを実施し、教員は月に１回観察するチェックシートがある。授業に意欲がなく集中力がなくなってきた子はいないかとか、休み時間や放課後に１人でいることが多い子はいないかとかいうチェック項目がたくさんあり、それを見て教員が観察してチェックしていくものある。いじめの兆候の察知やいじめの認知は、アンケートからでしか掴めないわけでなく、いろいろなところからの情報や教員の観察眼だったりする。いじめの対応がいろいろなことがきっかけで始まっていくことがすごく重要なポイントなので、その主体性を無視した取組はできないと思う。今、市の取組が構築されて、これで行う場合、先生方の気持ちや生徒も取り組んでいるので、似たような取組であっても、今までのペーストを変えていかなきゃいけないとなると、少しハレーションが起きてしまう懸念がある。市として取り組むことはとても重要で、発信をして共通理解も必要だが、各学校の主体性を大事にした取組であるべきだと思う。おそらく校長会で提案しても、多くの校長がそういう話をするであろう。

【委員】

月に１回の観察は学級全体の傾向と、一人一人の生徒のことのどちらか。

【委員】

学級担任がこのチェック項目を参考にして、自分のクラスの子どもたち一人一人を観察するっていう取組である。今、朝の打ち合わせの時間を削減し、週に１回しか朝の打ち合わせをしていない学校がほとんどだと思うが、毎日日報を出している。その中には連絡事項の他に月１回いじめ防止チェックシー

トを掲載している。これは先生方の観察眼を育てるといった意味もある。

【委員】

その先生の活動に対して、担任が一人で抱えないようにするための学校のサポート体制はあるのか。

【委員】

もちろんある。結果を全教職員に配布し、全教職員がチェックをする。担任が中心になることはあるが、廊下で歩いてる生徒の観察をどの教員もする。そして、気がついた教員が動く。中学校は、１人で抱えさせない仕組みが既にある。例えば、週に１回、水曜日は学年生担会で生徒指導担当、各学年生徒指導担当、校長、教頭が情報共有する。また、学年では必ず学年単位で情報共有するので、１人で抱えることのない取組を行っている。

【委員】

小学校はどうか。

【委員】

３～４人の支援コーディネーターが空き時間を作って各教室を巡回する。それを元に学年と共有しながら、職員会議の度に気になるお子さんを全教職員で必ずみんなで共有する。みんなで共有する前に学年で共有する。その前に支援コーディネーターが見てるというシステムは小学校にもある。ただ、一番の問題は、子どもたちを救わなければならないという教員の気持ちはあるにせよ、学校の構造的な問題があると思っている。今、朝の時間は、健康観察は５分しかない。その後の１０分間は、文科省でも進めている、あまり子どもたちの拘束時間を長くしないようするモジュール時間となっている。この１０年間、いじめの重大事態があってから、いじめ以外のことでも教員の担うべき仕事がものすごく増えてる。 道徳の教科化や外国語教育、その他いろいろなものが入り、徐々に教員の中に積み上がっている。費用対効果のある業務については、教員は決して力を抜くことはない。もうすでに教員の勤務時間である８時半から５時まで、教員は十分に働いている。子どもは８時半前に登校するので、教員も早く来る。給食の時間も全て指導する。子どもが帰るのが３時４５分。休憩時間４５分あっても、実質取れていない。残り時間３０分で、教材研究をし、全てのいじめに対応していくのは不可能である。よって、今、本校ではいじめの漏れはほとんどないと思いますが、何か起きた場合、今のところ保護者の申し入れ、他の児童の申し入れ、本人からの申し入れでその会議をやるとなると、５時過ぎに始めて、７時過ぎまで学年全体でやることになってしまう。やり方としては、先生方のセンサーとか、学期に１回のアンケートなど、子どもの申し出に頼ってるところはあるが、今の段階で教員はやれることはやっていると思う。

私が１番最初のアンケートで、緊急通報があった場合、対応していかなければアンケートの意味がないと申し上げたが、逆に言えば、そこだけに対応していくのであるのならば、その匿名性や言いづらさがあるかもしれないが、可能ではないか。今、唯一教員は『ＣＯＣＯＯ』という欠席連絡システムで誰が休んでいるかをチェックしている。『ＣＯＣＯＯ』は連続欠席や３０日以上の欠席などの情報や欠席理由が出る。このような形でシステム的に担保されることであるならば、子どもがタブレット開いて１

日１回やることはやぶさかではない。そこで、「心のコップ」が２から４になったということが、赤色で示されたり、きちんとその子がピックアップされたりして、ポップアップで表示される。先生が探すのではなく、それが毎日無理なくできるというシステムを担保しないと、やはり今の教員に何を言っても、前向きにさせる自信は私にはない。時間的な保証がない限りは、私はちょっと難しいと思う。今はもうギリギリで精一杯やっていただいてるっていう状況がある。

【委員長】

私は、今、それぞれの学校がやろうとしていることを、より一般化させられないかと考えている。先生方がこれまでの経験に基づいて作られてきたシステムを、できるだけその延長上にデジタル化することによってみんなで共有できるようにする、あるいは教育委員会からも見れる、あるいは小学校のデータをそのまま中学校にも送って引き継ぎができるような形になっていくと、デジタル化することの意味が大きくなる。ただ、今だとそのデジタル化のためにかかる手間が多すぎて、援助ではなく逆に使われている状態になってしまう。今、小・中学校が言われてきた話を基により一般化するには何ができるだろうか。また、その中で子どもの声を反映させるにはどうしたらよいのか。

ただ、緊急性のある子どもを救うためにはその月に１回のペースでは到底間に合わないので、それでは別になる。逆に月１回ペースだったら、その各学校のデータを決まり切った形で出力する。あるいは、子どものリストアップをする。何かそういったことで、今やってるものがより一般的な形に持っていける方法があればと思う。

時間が来たので、ここで一旦、この２番目の議題打ち切りとします。今後について事務局にお願いする。

【事務局】

たくさん御意見いただきいた。今年度は会議がこれで終わりなので、またメールなどで御意見をいただき、やり取りをしていきたい。

【委員】

最後にシステム上できるのかについて、他の自治体でやってるシステムを聞くことは可能か。

【事務局】

それはできる。

【委員】

システム会社に見積もりだけでもしてもらったらどうか。

【事務局】

はい。本市で使ってるシステムがいくつかある。Ｇｏｏｇｌｅ、ＣＯＣＯＯ、校務支援システムなどの活用も含めて検討していく。

【委員】

今期の実施はどういう格好になるか。

【事務局】
現時点で具体的な案はない。そもそも案を作る前に色々確認したいことがある。各学校の取組として、お互いの感度をきちんと高め合うことや、様子をきちんととるために、具体的に何をやっているか、どういうシステムを使っているかなど、集めたことはないので、その辺を把握するところから始めていこうと思う。多分現場としてもできる範囲ではないか。
【委員】
とりあえず今期は見送るということか。
【事務局】
例えば現時点で、集約するのであれば、次の会議にまとめたものを共有することはできる。それを読んだ上で、第３回に皆さんにデータや取組、集約結果を見て議論し、第４期で、こういうシートがよいのではないかと提言をされ、第５期、６期にさらにシステムの提言をいただく方向となるのではないか。
【委員長】
臨時の会議を持たなくてよいのか。
【事務局】
確かに議論はしていただきたいが、市の予算との関係もありますので、ちょっと難しいと思う。
【事務局】
もし、調査会が各校の資料を集めたり、使い方を教えてもらったり事務的なものを調べてほしいということあれば可能である。
【委員】
先ほどの学校で取り組んでいるシート使うことは理解した。ただ、それが市内全校でそうなのか疑問になった。
【委員】
誰を対象にするのかが結局モヤモヤしたまま話が進んでいるような気がする。「心のコップ」アンケートの敷居が高いような話にもなりつつあり、もう少しライトな質問ができるのではないか、その方が負荷はかからないのではないかという話にもなったりしながら、システムの話にもなったりする。アンケートを進めるシステムを作る云々以前に、どんなお子さんを対象にするかはっきりさせるべきではないか。
要は、その前段階で、ライトな形にして今回進めていくのか、それとも、重大案件になりそうなものや、際どいところのものを拾うためのアンケートをするべきなのか。私は、下手すると以前にもあった大きな事件になってしまいそうなものを拾い上げるために、この回で色々提言しながら進めているものだと思っていた。その前段階で拾えるものとか救えるものがあるのではないかっていうところの話を聞いた時、茅ヶ崎市が今、それほど大きな案件に関わっていないので、市内全体でやろうとしているならば、その小さなところを潰して、今後の大きな案件を潰していくっていうのが先決ではないかと思った。その辺がはっきりしないままシステムを作るだとか紙ベースでやるだとかいう話になると、結果的に得

られるものが随分変わってくるかと思うので、そこだけでも今日決めた方がよいのではないか。

【委員長】

先ほどまとめてはいたのだが、緊急性の高い案件は今回の茅ヶ崎のシステムでは対応できない。無理である。緊急性が高い人たちには「心の電話」などで対応していくことの方がはるかに有効で、学校で印刷物を配付しながら口頭でも指導することぐらいしかできないであろう。今回のシステムでそれを拾うなんてことは、上にあげて帰ってくるまでに１～２か月もかかるような状況の中で、市全体でやるとお金もかかるので、到底できない。それは別に考えるしかないなと私は思う。だけど、せっかくの「心のコップ」アンケートみたいなものでやれるとしたら、どんなやり方ができるだろうか、現時点でやろうと思ったら、さっき課題が言われたように紙ベースでやればすぐにでもできるかもしれない。

いずれにしても、それを各学校にお願いするとなれば、一体これがどこでどういう役に立つのか、今まで自分たちのやってきた取組とどうリンクするのかなどをうまく説明する必要がある。前回までの「心のコップ」アンケートに関して言うと、意味はありそうだが、バランスが悪いという格好になっているので、もう１回試しに行うことはおそらくお願いしづらい。できることならばもう少し、どの段階のものを拾うのか、この拾ったものと各学校の普段の取組とどうリンクしていくのかをきちっと体系化したものを、来期お願いするしか手はない。ただ、そのために、そもそも各学校が今何をやってるのか自体もあまり分からないので、各学校の取組に関して、ある程度共通の部分で生かしつつ、整理していく作業をメールでやりつつ、それを踏まえて、来年の６月に、秋実施のために何ができるかというものを作り上げる作業になる。いずれにしても、緊急対応の話はこのシステムに乗っけるのは無理だと私は判断し、その代わりに何ができるかっていうのは、まだ十分議論もできるので、それはこれもメールでやり取りをするしかないのかなと思う。

【委員】

学校でやられてる取組の中での緊急対応は今あるのか。

【事務局】

緊急なものを把握するために一律に何かシステムを組んでいることはない。ただ、もちろんＳＯＳに関する窓口の周知や学校の先生から気になる子や案件について受けることはある。それは学校が教育委員会に相談をするくらいの緊急度であるが、それとは別なものは家庭や警察での対応になってくるのかなと思う。

【事務局】

今日いただいたことは集約し、皆さんに確認していただきたいことはメールでお尋ねして発信していく。

３　閉会挨拶

会長署名　滝　　充

委員署名　小島　秀一